

福井遺跡Ⅲ

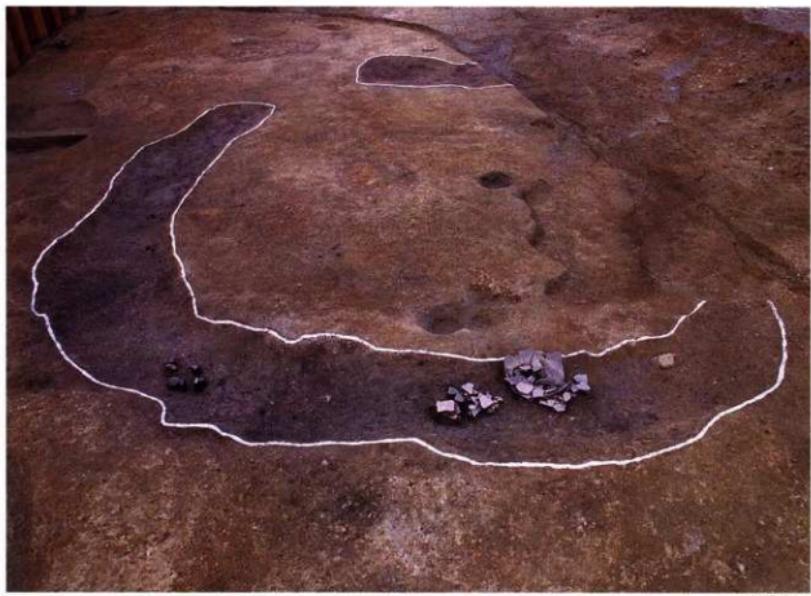
—府営西福井住宅建替えに伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

福井遺跡Ⅲ

—府営西福井住宅建替えに伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



古墳全景

はじめに

福井遺跡は、茨木市西福井・豊原町一帯に所在する弥生時代から中世にわたる遺跡です。平成12年に大阪府営西福井住宅の建替え事業に先立って実施した試掘調査で発見され、翌13年度に第1次調査、平成16年度に第2次調査を実施し、多大な成果をあげています。

本報告は、平成19年度に実施した第3次調査の成果をまとめたものです。

福井遺跡とその周辺には、三角縁神獣鏡をはじめ多くの遺物を出土した大阪府を代表する前期古墳である紫金山古墳、古墳時代後期の独立した大型横穴式石室墳である海北塚古墳・青松塚古墳・南塚古墳など、日本考古学史上、著名な古墳が濃厚に分布しています。

第1・2次調査では、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代の集落跡が検出され、この地域に住まいした人々の生活を復元する上で重要な情報を得ることができました。

第3次調査に当たる今回の調査対象地は、海北塚古墳の近接地にあたり、この古墳に関連する遺構・遺物の検出が期待されました。発掘調査の結果、海北塚古墳に先行する方形墳の基底部を確認することができました。この地域における古墳と古墳群の変遷の理解に大きな示唆を与えられました。

調査に当たっては、大阪府住宅まちづくり部住宅経営室、茨木市教育委員会のご協力をえました。調査に理解を示していただいた地元自治会のみなさんと併せて深く感謝の意を表します。引き続き、府民の皆様方には文化財の保護にご理解とご協力いただきますようお願いいたします。

平成22年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 野口雅昭

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課の依頼を受け、府管西福井住宅建替え工事に先立って実施した福井遺跡（茨木市西福井2丁目所在）の発掘調査報告書の3冊目である。
2. 発掘調査を実施した調査区は茨木市西福井2丁目に所在する。また調査番号は0032である。
3. 現地調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第一グループ技師奥和之を担当者として、平成19年4月2日から平成20年3月31日の期間で実施した。報告書作成にかかる遺物整理は、調査管理グループ主査三宅正浩、同副主査藤田道子が平成20年度（平成20年7月23日から平成21年3月31日）・平成21年度（平成21年4月1日から平成22年3月31日）に実施した。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課、地元自治会をはじめとする諸機関、諸氏の協力を得た。
5. 本調査の写真測量は、大阪測量株式会社に委託した。なお、写真撮影フィルムについては、受託会社において保管している。
6. 本書に掲載した出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
7. 本書の執筆・編集は奥が行なった。
8. 本書は300部を印刷し、一部あたりの単価は662円である。

凡　　例

1. 座標については、第1・第2次調査では日本測地系平面直角座標（第VI系）を用いたが、当調査（第3次）では世界測地系平面直角座標（第VI系）を用いた。
数値の違いの一例をあげる、
 $X = -129,500$ 、 $Y = -38,100$ （日本測地系平面直角座標（第VI系））は、
 $X = -129,153.3463$ 、 $Y = -38,360.9061$ （世界測地系平面直角座標（第VI系））となる。
2. 方位については、座標北で示し、標高については東京湾平均海水面（T. P.）を基準とした。
3. 土色については、基本的に小山正忠・竹原秀夫編『新版土色帖』日本色彩研究所 1992年版に準拠した。
4. 遺構番号については、全調査区を通して番号を付け、前に遺構番号、後に遺構の種類名を付けた。また、古墳のように複数の遺構でひとつの遺構を形成するものについては、「古墳1」のいうように、先に遺構の種類名、その後ろに通し番号を付けた。
5. 遺物については、挿図、図版の番号を一致させた。

目 次

カラー図版

はじめに

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過.....	1
第1節 調査の経緯と経過.....	1
第2節 調査の方法.....	3
第2章 位置と環境.....	4
第1節 位置的環境.....	4
第2節 歴史的環境.....	4
第3章 調査の成果.....	9
第1節 基本層序.....	9
第2節 遺構と遺物.....	9
第4章 まとめ.....	23
抄録	

図版目次

図版1 遠景	(上) 調査地遠景(東より) (下) 調査地遠景(西より)	9溝断面(南より) 15溝断面(西より)	
図版2 遠景	(上) 調査地遠景(北東より) (下) 調査地遠景(南東より)	62溝断面(東より) (右側上から)	
図版3 全景	(上) 2区全景(真上より) (下) 1区全景(南より)	7溝断面(西より) 14溝断面(北西より)	
図版4 遺構	(上) 1区全景(北より) (下) 1区全景(南より)	24溝断面(南より) 62溝西端断面(東より)	
図版5 遺構	(上) 古墳全景(北より) (下) 2区全景(南より)	図版11 遺構 (左側上から)	65溝断面(南東より) 67溝断面(南東より)
図版6 遺構	(上) 2区溝群(東より) (下) 2区溝(南より)	18柱穴断面(南より) 26柱穴断面(南より)	
図版7 遺構	(上) 古墳周溝遺物出土状況 (下) 古墳周溝南側遺物出土状況	(右側上から)	
図版8 遺構	(上) 周溝南側出土状況(上部) (下) 周溝南側出土状況(下部)	66溝断面(東より) 112溝南側断面(南東より)	
図版9 遺構	(上) 古墳北周溝断面(西より) (中) 古墳南周溝断面(西より) (下) 古墳西周溝断面(南より)	19柱穴断面(南より) 100柱穴断面(南西より)	
図版10 遺構	(左側上から) 6溝断面(南より)	図版12 遺物 図版13 遺物 図版14 遺物	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯と経過

大阪府建築部では、現在老朽化の著しい木造平屋建ての府営住宅を土地の有効利用と住宅環境の改善のため、中・高層住宅に建て替える計画を推進している。今回の調査地である府営西福井住宅もその候補に挙がっていた。周辺は、大阪北部で東西に延びる北摂山地の南側に位置し、府史跡紫金山古墳や府史跡海北塚古墳などの多くの古墳や遺跡が存在する地域に位置することから、遺跡が存在する可能性が高いものと判断された。建築都市部住宅整備課（現・住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課）と文化財保護課で協議を行った結果、建て替え工事に先立つ試掘調査を平成12年度に実施し、遺構・遺物の有無を確認することとなった。その結果、弥生時代後期の溝、古墳時代後期の溝、平安から鎌倉時代にかけての遺構・遺物などを検出し、当地周辺が遺跡であることが確認されたため、遺跡名を「福井遺跡」と名付けた。

府営西福井住宅建て替え第1期工事に先立つ調査は、平成13（2001）年9月13日から平成14（2002）年1月30日にかけて、大阪府教育委員会が実施し、大阪府教育委員会文化財保護課調査



第1図 福井遺跡の位置

第二係技師宮崎泰史が担当した。調査箇所は、建設予定地内の西側で、調査面積は約2810m²を測る。調査に伴って検出した主な遺構は、竪穴住居3棟、掘立柱建物9棟などである。竪穴住居跡は、遺構内の遺物などから、すべて古墳時代後期（6世紀後半）と推定される。掘立柱建物は、古墳時代後期のものが5棟、平安時代（10世紀）と推定されるものが4棟である。

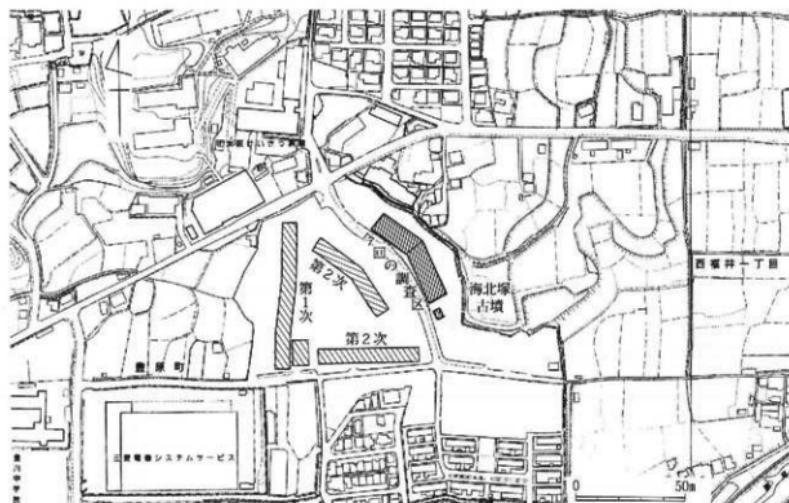
当調査の成果は、『福井遺跡 一茨木市豊原町所在一』大阪府埋蔵文化財調査報告2002-5 大阪府教育委員会 2003を刊行している。

平成14（2002）年1月19日には、地元住民を対象とした現地説明会を開催し、約250名の参加を得た。

府営西福井住宅建て替え第Ⅱ期工事に先立つ調査は、平成16（2004）年8月2日から平成17（2005）年3月23日にかけて、大阪府教育委員会が実施し、大阪府教育委員会文化財保護課調査第一グループ技師横田 明が担当した。調査箇所は、第Ⅰ期調査地の東側にあたり、調査面積は約2879m²を測る。主な検出遺構は、調査地南側の東西に伸びる調査区の中央部付近において、弥生時代後期（3世紀）の竪穴住居跡5棟などを検出した。

当調査の成果は、『福井遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財調査報告2005-2 大阪府教育委員会 2006を刊行している。

今回の調査は、建て替え第Ⅲ期工事に先立つ調査である。平成19（2007）年7月2日から平成20（2008）年2月22日にかけて調査を実施した。調査箇所は、第Ⅱ期調査地の東側を南北に走る道路を挟んだ東側、古墳時代後期の横穴式石室を伴う府史跡海北塚古墳の西隣に位置する。調査面積は約2000m²である。



第2図 調査区の位置

調査はまず、第2期調査地との間を走る道路に沿って、逆「く」の字型に調査区を設定し、中央の折れ点から北側部分（第1調査区）の調査を行った。はじめに、現地表から厚さ0.5mから1.8mを機械掘削し、その後は人力によって掘り下げを行い、検出した遺構・遺物を随時記録していった。1区の調査と埋め戻しが終了した後、折れ点から南側（第2調査区）も、同様に調査を行った。

平成20（2008）年1月26日には、当地周辺の地元住民を対象に、福井遺跡発掘調査現地公開を開催し、多数の参加を得た。府営西福井住宅建て替えに先立つ発掘調査は、今回の第Ⅲ期で最後となるため、これまでの第Ⅰ期から今回の第Ⅲ期までの調査成果を総括するかたちで展示・説明を行った。

報告書作成に伴う遺物整理作業については、本府教育委員会と、住宅まちづくり部住宅経営室住宅整備課との協議の上、平成20（2008）年度から開始することとした。

第2節 調査の方法

西福井住宅の建て替えに伴う発掘調査は、今回の調査で第Ⅲ期目である。先に行われた第Ⅰ・Ⅱ期の調査では、旧国土地標VI系を使用していたが、今回は、世界測地系平面直角座標「第VI系」を使用している。これによると、 $X = -128,370.0$ 、 $Y = -41,273.2$ を第1調査区北角、 $X = -128,385.0$ 、 $Y = -41,286.5$ を同西角、 $X = -128,398.3$ 、 $Y = -41,237.3$ を同東角（＝第2調査区北角）、 $X = -128,411.1$ 、 $Y = -41,253.5$ を同南角（＝第2調査区西角）、 $X = -128,448.6$ 、 $Y = -41,214.5$ を第2調査区の東角、 $X = -128,457.4$ 、 $Y = -41,232.0$ を同南角となる。

検出した遺構については、全調査区を通して番号を付け、前に遺構番号、後に遺構の種類名を付けた。また、古墳跡のように複数の遺構でひとつ形成するものについては、「古墳1」のように、先に遺構の種類名、その後ろに番号を付けた。

発掘調査の方法は、まず、崩落防止のための矢板鋼を調査区西辺に沿って打ち込み、次に表土層および盛土を機械掘削で除去した後、人力によって掘り下げ・検出作業を行った。

また、遺物の出土状況、土層断面については、適宜図面を作成した。なお、調査の迅速さと省略化をはかるため、基本的にヘリコプターによる写真測量を実施した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

今回の調査地である福井遺跡は、大阪府北部の茨木市に所在している。この地一体は、北に北摂山地、南が淀川、西を千里山丘陵に囲まれた、北摂地域東部に位置する三嶋地域の西部に所在する。北摂山地の南側は、南方向へ緩傾斜した平野部と、山地から伸びた数本の舌状台地で形成されており、その台地間を河川が流れている地形である、河川は、東から芥川・如是川・安威川・茨木川・勝尾寺川などがある。内いくつかは途中で合流し、最後は淀川に注ぐ。これらの地形・水利に恵まれた環境故、当地域周辺では古くから多くの遺跡が展開している。

今回の調査地である福井遺跡は、北側に所在する紫金山古墳を頂にして南方向に下る傾斜と、東側に隣接する海北塚古墳を頂にして西方向に下る台地斜面によって、調査区全体が、およそ北東から南西方向に傾斜している地形である。

第2節 歴史的環境

三嶋地域における人の営みは、旧石器時代には既にその芽吹きが見られ、郡遺跡や東奈良遺跡などにおいてナイフ形石器等が見つかっている。

縄文時代は、耳原遺跡で縄文時代晚期の甕棺墓16基が検出されている⁽¹⁾が、他に判明している縄文時代の遺跡数は少なく、現時点で地域全体の像を述べるのは難しい。

弥生時代になると、人の営みが本格的に見られるようになり、遺跡数が増加する。大阪湾から淀川を北上し、広がったと考えられる当地域の弥生文化は、まず淀川に近い安威川中下流域の低湿地で栄える。その地に所在する東奈良遺跡は、当地域の弥生時代前期を代表する遺跡で、環濠と方形周溝墓が検出された。また、この遺跡は、流水文銅鐸や銅戈・勾玉の鋳型、轍の羽口が出土したことでも知られている⁽²⁾。前期末になると、東奈良遺跡の北方に位置する郡遺跡や耳原遺跡でも、集落を形成し始める。

弥生時代中期になると、東奈良遺跡から安威川に沿うような状況で、集落が北部に展開していく傾向が見られる。東奈良遺跡の北方約2.5kmに所在する郡遺跡では、現生涯学習センターの場所から、方形周溝墓群と、それを区画する溝を検出した⁽³⁾。郡遺跡の東に隣接している倍賀遺跡は、郡遺跡の分村と推測されており、方形周溝墓群や竪穴住居、多量の土器が廃棄された溝2本、東西を走る幅5mから8mを測る大溝の最下層から銅鐸土製品を検出するなど、多くの遺物が出土した⁽⁴⁾。耳原遺跡では、中期前半の大型竪穴住居や、後半の甕棺墓を検出した⁽¹⁾。またこの時期に、安威川中流東岸の台地上に位置する太田遺跡でも集落が出現する。

弥生時代後期になっても集落の北上は続き、北摂山地の麓に位置する安威城・安威両遺跡や、



第3図 周辺の遺跡分布図

- ①福井遺跡 ②紫金山古墳 ③青松塚古墳 ④南塚古墳 ⑤海北塚古墳 ⑥新屋古墳群 ⑦西福井遺跡 ⑧將軍塚古墳
- ⑨將軍塚古墳群 ⑩宿久庄遺跡 ⑪中河原北遺跡 ⑫中河原遺跡 ⑬郡遺跡 ⑭郡山遺跡 ⑮郡山城跡

塚原遺跡まで展開していく。郡遺跡はこの時期に最盛期を迎える、現市立中央図書館の場所から、環濠と推測される南北に走る大溝と、その西側から竪穴住居・井戸・土器廃棄土壙などが検出している。太田遺跡からは竪穴住居を検出した。太田遺跡の所在する台地の南側下部に位置する総持寺遺跡では、この時期に集落が出現し、周溝墓群や住居群などが検出されている。

安威川の西方を流れる勝尾寺川の北側に位置する当調査地周辺は、主に古墳時代の遺跡を中心として存在している。その中でも、古墳時代前期に築造された紫金山古墳（府史跡）は、当三嶋地域西部で最初期に築造された盟主墳ともいべき古墳である。全長約110mの前方後円墳で、後円部に造られた和歌山県紀川流域産の結晶片岩を使用した竪穴式石室内からは、全国でも当古墳でしか検出されていない仿製勾玉文帶神獸鏡を含む12面の鏡のほか、剣や刀、鎌などの鉄製品、堅矧板革縫短甲・勾玉・貝輪などの多くの副葬品が良好な状態で出土している⁽⁵⁾。また、紫金山古墳の東方を流れる茨木川を挟んだ丘陵上に將軍山2号墳があった。現在は住宅地となっており、その姿を見ることはできないが、全長約110mの前方後円墳で、紫金山古墳と同じ石材を使用した竪穴式石室内より、刀・剣・鎌などの鉄製品、勾玉・小玉等の玉類などが検出されている⁽⁶⁾。ともに三嶋地域西部を代表する古墳時代前期の前方後円墳であるが、將軍山2号墳は、出土した円筒埴輪片や副葬品等から、紫金山古墳よりも若干時期が下った前期後葉の時期と推測されている⁽⁷⁾。

古墳時代中期になると、古墳築造の中心は、当遺跡の安威川東岸に位置する太田茶臼山古墳（伝 繼体天皇陵）を中心とした三嶋地域中央部に移る。中期後葉になると、三嶋地域西部で再び古墳が築造され始める。西福井遺跡では、総数12基からなる小規模な円墳3基、方墳6基を検出した。鶴形埴輪片や円筒埴輪片などが見つかっており、須恵器から5世紀後半と推測される⁽⁸⁾。

古墳時代後期になると、三嶋地域西部においても再び古墳が多く築造されるようになる。当遺跡近隣では、北側に、南方向に口を開いた片袖式横穴式石室で、その内部より鏡1面や銅製馬鐸2個、馬具、多量の須恵器等を検出した青松塚古墳⁽⁹⁾、全長約50mの前方後円墳で、片袖式横穴式石室の内部に凝灰岩製組合式石棺2基（長持型・家型）、武具・馬具・玉類等の副葬品を伴った南塚古墳⁽¹⁰⁾が所在する。東側に接して、西方向に開口した片袖式の横穴式石室で、内部に綠泥片岩製の石棺を持ち、竜頭を表わした環刀柄頭や武具・馬具・須恵器等を検出した海北塚古墳（府史跡）が所在する⁽¹¹⁾。また海北塚古墳は、出土した須恵器から、複数の時期で構成されているという指摘がある⁽¹²⁾。これら3基の古墳は、古墳時代前期の紫金山古墳を頂上とする、南東方向に下る丘陵の南西側斜面上に並んでおり、紫金山古墳の被葬者との関係が推測される。また、西福井遺跡の北西方には、総数38基からなる新屋古墳群が所在する。最も大きい円墳を中心として、その周囲の丘陵稜線や丘腹に小型の円墳が數基存在しており、遺跡の破壊にともなう緊急発掘調査で、内数基の調査が行われた。その結果、主に横穴式石室を主体としていたようで、副葬品としては、鉄器や玉類、多量の須恵器・土師器が検出しており、いずれも2回以上の

埋葬が認められた⁽⁹⁾。古墳時代中期後葉（5世紀後半）の群集墳である西福井遺跡と同一丘陵の上部に位置していることから、古墳時代中期後葉から古墳時代後期にかけて、墓域の拡充があった可能性が推測される。他にも、当遺跡の当方を流れる茨木川を挟んだ北東方の丘陵には、かつて「鎌足古廟」と称されていた横穴式石室を伴う円墳を含む、総数5基の古墳からなる将軍山古墳群⁽⁹⁾や、南北に2基の円墳をもち、内1基が南向きに開口した横穴式石室を持つ真龍寺古墳群⁽⁹⁾がある。また、当遺跡の南側を流れる勝尾寺川を挟んだ南側丘陵上でも、径約15m・高さ約3mの円墳で、復元高約1.1mの大礎などを検出した郡神社古墳⁽⁹⁾や、南向きに開口した両袖式の横穴式石室内に、凝灰岩製の組合式石棺や、鉄製馬具等の副葬品を検出した見付山古墳⁽¹²⁾など、これらを含む数基の古墳で構成される郡古墳群⁽⁹⁾が存在する。

当遺跡の東方約2.0kmを流れる安威川山間部入口で、三嶋地域を眼下に一望できる高地に、古墳時代終末期の阿武川古墳（伝藤原鎌足墓）⁽¹³⁾があることから、三嶋地域一帯が当時重要な地域であったと言えよう。

古代律令期になると、三嶋地域西部は島下郡に編成される。現在も残っている地名から、当遺跡の南東約2.0kmに所在する郡遺跡が、その郡衙跡と推測されているが、郡遺跡における過去の調査で掘立柱建物などが検出されてはいるものの、郡衙跡と確証を得るには至っていない。当地一帯は、当時中臣鎌足をはじめとした中臣氏の勢力地の一つであったと考えられ、その支配下についていたと思われる穗積氏の氏寺として、郡遺跡の西部に穗積庵寺が創建された。7世紀後半の蓮華文端丸瓦・重弧文端平瓦などが出土しているが、その正確な寺跡位置・伽藍配置等は不明である⁽¹⁴⁾。またこの時期には、三嶋地域の東西を通るように古代・山陽道が整備された。

平安時代になると、律令制に代わり、貴族や寺社によって支配される荘園制が主流となる。当地一帯は、元々中臣氏からの流れをそのまま引き継ぎ、摂関家である藤原家の荘園であった。この時期、古代・山陽道とほぼ同じ道程で中世・西国街道が通り、また、平安時代前期には懸持寺が創建された。その西国街道から南へ約1.4km、当遺跡から南東方約3.3kmに所在する懸持寺遺跡では、掘立柱建物を約80棟検出した⁽¹⁵⁾。北隣に所在する懸持寺北遺跡でも、8世紀から10世紀代の建物を約100棟検出しており⁽¹⁶⁾、当地域における一大拠点集落であったといえよう。当該時期の今回の調査地周辺は、福井庄の背轍であった。中世・西国街道沿いで、当遺跡の西側に位置する宿久庄遺跡では、9世紀後半から10世紀頃の掘立柱建物や、13世紀後半の掘立柱建物が検出されている。この頃になると、懸持寺遺跡のような大型集落だけではなく、三嶋地域全域において、人の営みがみられるようになったと言えよう。武家政権の成立とともに、当地一帯に及んでいた摂関家の支配は衰え、のちにその氏神・氏寺である春日社・興福寺に寄進された。福井庄も同様に、室町時代になると興福寺の寺領に編入される。

《註》

(1)『耳原遺跡発掘調査概要』茨木市教育委員会 1982

- (2)「東奈良・東奈良上地区向整理事業に伴う発掘調査概要報告」茨木市教育委員会 2003
- (3)「郡遺跡発掘調査概要報告書一茨木市立生涯学習センター建設事業に伴う発掘調査概要報告」茨木市教育委員会 2005
- (4)「倍賀遺跡発掘調査概要報告書一平成4年度発掘調査概報」茨木市教育委員会 1993
- (5)「紫金山古墳の研究一古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究一」平成14~16年度科学研究費補助金(基盤研究)
(B)(2)研究成果報告書 京都大学大学院文学研究科 2005
- (6)藤沢一夫「考古学上からみた茨木市将軍山古墳」『大阪の教育』第146号 1960
- (7)「将軍山古墳群一考古資料調査報告書1-」『新修茨木市史』史料編 2005
- (8)「5世紀代の小規模墳について」『みかん山古墳群』大阪府埋蔵文化財調査報告1997-2 大阪府教育委員会 1998
- (9)「古墳」『茨木市の文化財』第3号 茨木市教育委員会 1963
- (10)梅原末治「堺原の群集墳と福井の海北塚」『考古学雑誌』8巻2号 1917
- (11)中村浩「摂津海北塚古墳出土須恵器の再検討」『考古学雑誌』78巻3号 1993
- (12)『茨木市見付山古墳発掘概報』田代克己 1989
- (13)『高槻市史』第6巻 考古編 高槻市 1973
- (14)『茨木市史』茨木市 1969
- (15)『続持寺遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財調査報告2006-5 大阪府教育委員会 2007
- (16)「続持寺遺跡一住宅都市整備公園仮称茨木・三島丘地区住宅建設に伴う発掘調査一」(財)大阪府文化財調査センター
1998

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

今回の調査地域は、北摂山地裾部に所在し、南方に傾斜する地域で、同じ北摂山地から延びる台地の西側斜面上に位置する。従って、調査地全体が、およそ北東から南西方向に傾斜している地形で、府営住宅が建てられる以前の旧現地形での標高は、第1調査区北端が31.2m、第2調査区南端が28.6mと、比高差は約2.6mを測る。調査前に存在した府営住宅の建物は、旧耕土上を盛土で造成し、緩やかな傾斜にした後、建物が建てられている。

基本層序については、各調査区で作成した土層断面図を参考に精査し、各地点ごとの標準的な土層堆積を抽出し、模式図的に図示した。(第4図)

以下、確認した遺構・遺物に基づく層序を記述する。

盛土 府営住宅建設時の造成の盛土で厚さ0.5mから0.7mを測る。

I層 オリーブ色砂混じりシルトを基本とする層で、調査地区全域にわたって最上層に認められる。府営住宅建設直前までの耕作土である。層厚0.1mから0.2mを測る。

II層 丘陵斜面に堆積した層で、1層から3層に分かれる。地点ごとに粘質シルト、砂、砂質土などのように土質が異なり、色調も同様である。層厚0.2mから0.5mを測る。

III層 調査区中央から東側に認められる層で、オリーブ灰色細纖混じりシルトを基本とする。丘陵斜面に存在するIV層の水田を広げるために行った盛土層である。時期は、出土遺物から近世と推定される。層厚0.4mから0.8mを測る。

IV層 灰色砂混じりシルトを基本とする層で、調査区中央から東側に認められる。出土遺物から近世と推定される耕作土層である。盛土層を挟んで現耕作土層の下に存在している。層厚0.1mから0.2mを測る。

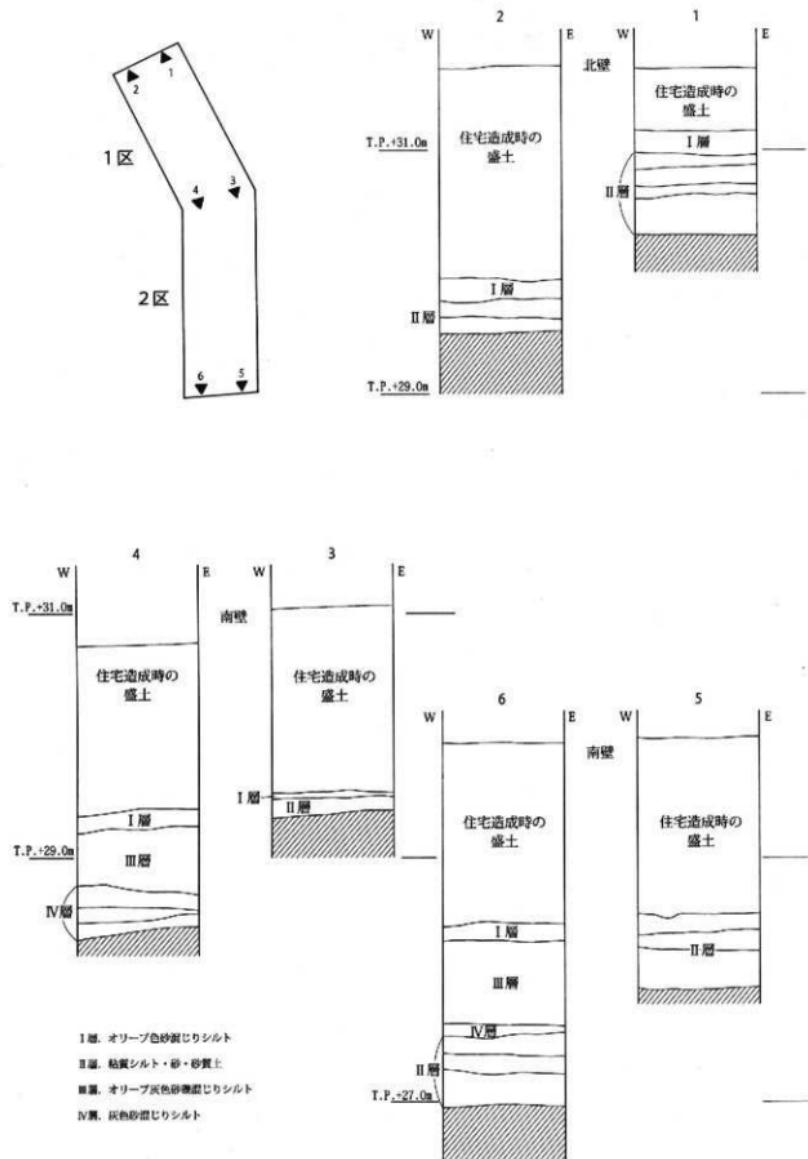
第2節 遺構と遺物

1. 古墳(第6図、図版7)

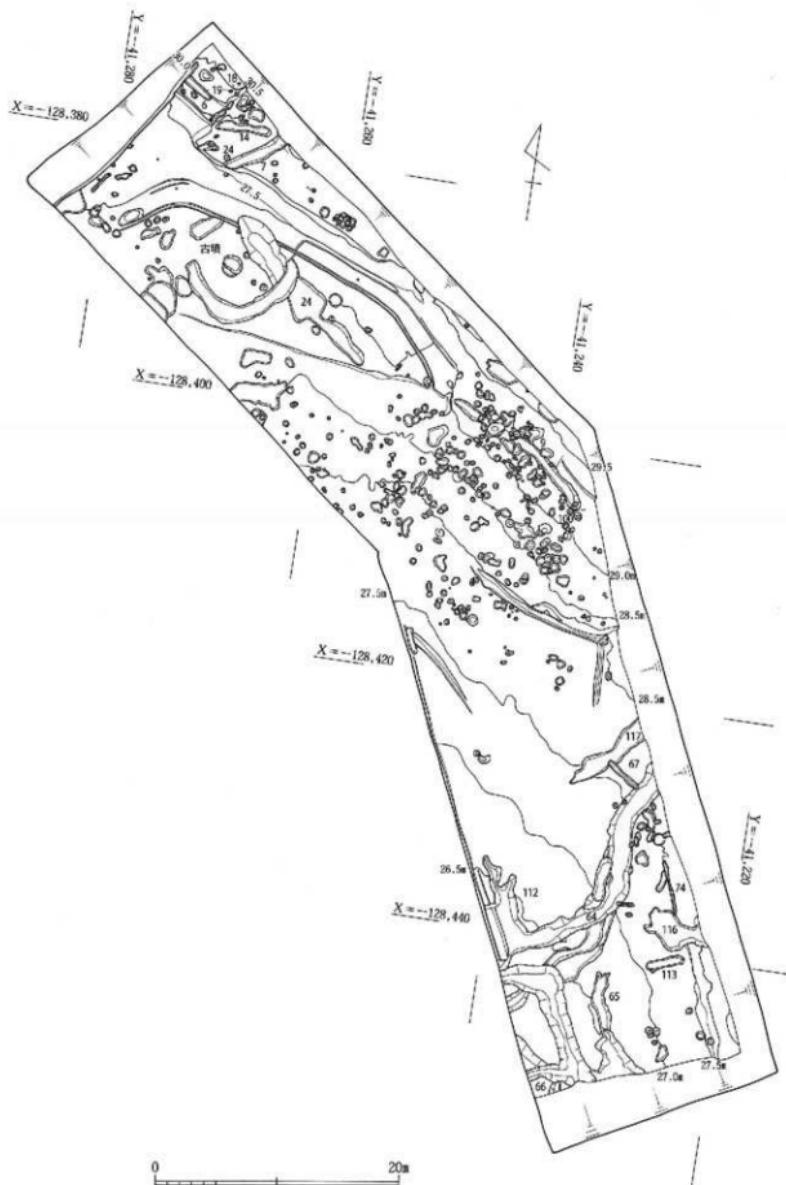
第1調査区の北側、X = -128,390、Y = -41,268付近を中心に検出した。地形的には、北摂山地から北西から南東に延びる丘陵南側の丘陵変換点付近に存在する。丘陵の先端付近には府史跡の海北塚古墳が存在する。

古墳は、墳丘の盛土及び北西側の周溝が後世の削平により欠失していた。周溝の形状から墳丘は、北東から南西辺約6.7m、北西辺が後世の削平のため欠失しているため不明であるが北西から南東辺は6.7m以上を測る隅丸方形に近い方墳である。

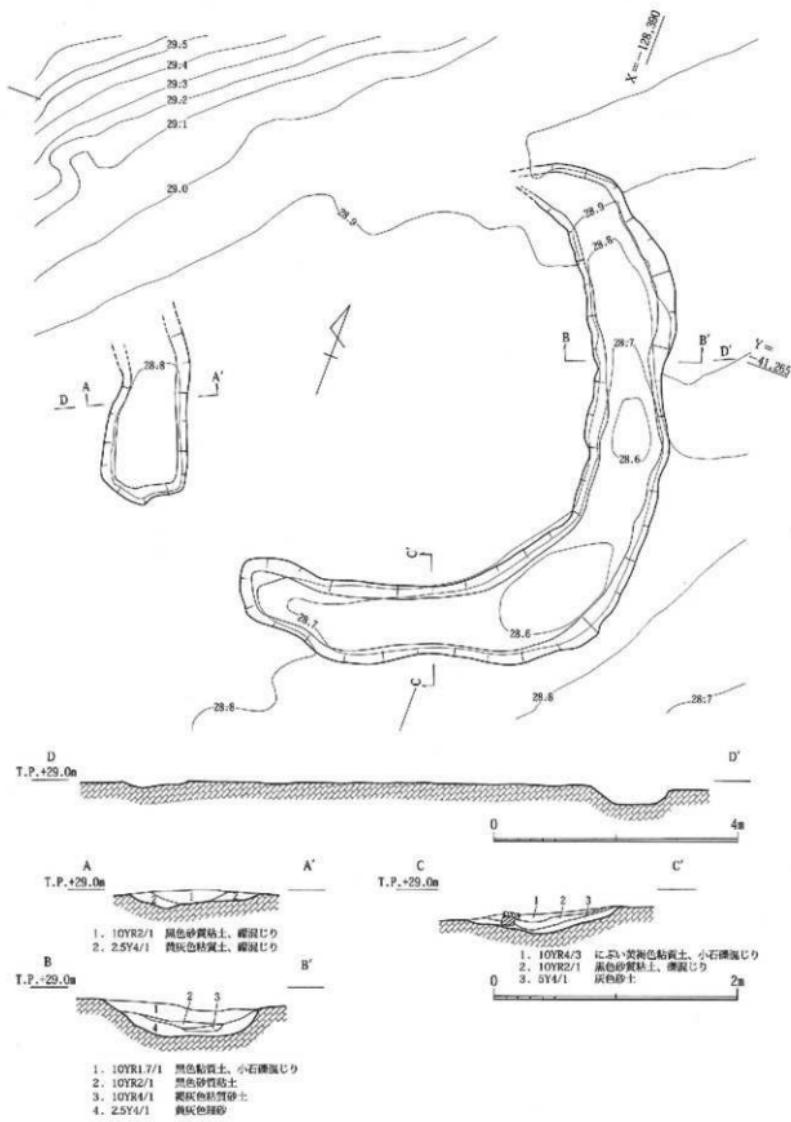
埋葬施設は、墳丘盛土が削平を受け欠失していること、墳丘中央付近で近世の土坑が存在して



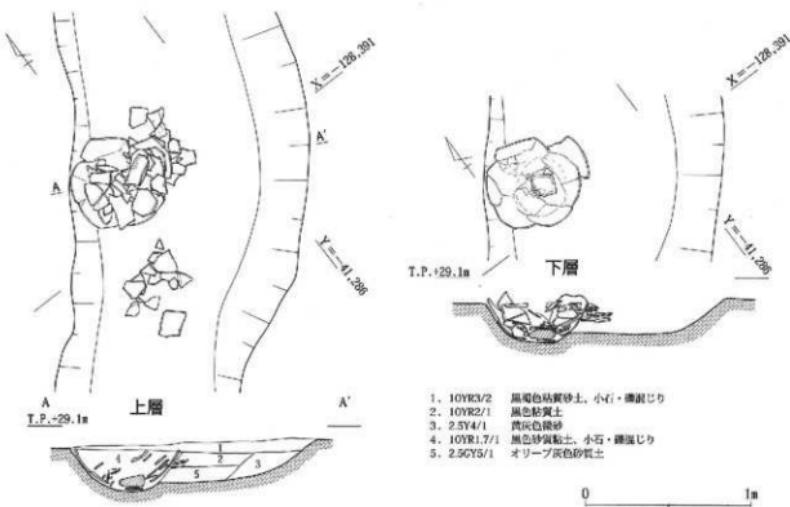
第4図 土層断面柱状図



第5図 全体平面図



第6図 古墳 平面・断面図



第7図 古墳 周溝遺物出土状況

いることから主体部らしき痕跡を検出しなかった。

周溝（第6図、図版9）は、北西辺と南西辺の2分の1が近世の水田の造成などにより欠失している。周溝は、北西辺から南東辺にかけて約5分の3が残存している。周溝は、幅1.0mから1.5mを測り、溝の深さは、各辺の中央付近が深く、角付近が浅いブリッジ状を呈している。特に西南隅では検出面と同一レベルである。溝の深さは最深で約0.34mを測る。

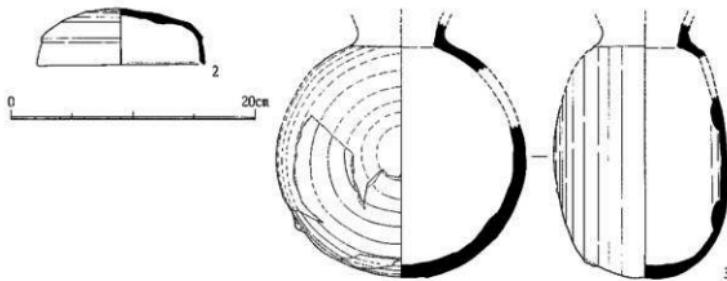
須恵器甕（第7図、図版7・8）は、周溝南東辺中央より北側、 $X = -128.398$ 、 $Y = -41.267$ 付近で、周溝の北側埴丘壁面に持たれかけるような状況で出土した。甕上部には、潰れた破片が内部や周囲に落ち込んでおり、それらを取り上げていくと、甕底部中央付近に、甕を固定させるためのものと推定される15cm程度の河原石が置かれていた。また、遺物の取り上げの後、甕が置かれていた周溝内周辺を精査すると、甕底部付近の地山が0.15m程度凹んでいた。この状況から甕の内部に石を置くとともに、甕を安定させるために地山を掘り窪めたものと推測される。甕内部からは、甕上部の破片、河原石以外の遺物等は出土しなかった。このため、甕が供獻土器として、周溝内に配置されたものと考えている。

甕の周辺からは、この他に須恵器壺蓋が甕の破片に混じって出土している。また、周溝内の甕出土地点から、南西側に約2.5m前後離れた $X = -128.395.8$ 、 $Y = -41.264.5$ 付近で堤瓶の破片が散乱した状況で出土している。これら出土した遺物は、現位置を保っていないが、甕と同様供獻土器として、周溝内に配置されていたものと考えている。

1の須恵器甕の口縁部は、体部の界からやや外反気味に口縁端部に向かって斜め上方に伸びる。口縁は断面三角形に近い形を呈する。体部の最大径は上方にある。口縁の界から体部最大径



第8図 古墳 周溝出土須恵器甕実測図



第9図 古墳周溝出土遺物実測図

に向かって外側に内弯し、丸みを持つ。体部最大径から下は、底部に向かって緩やかに内弯し延びる。底部は丸い。口縁部外面には11条のハケによる沈線によって区切りその内部に波状文を施している。体部外面は平行タタキ、体部内面は円形浮文のタタキによって仕上げている。口縁径約32cm、器高約73cm、体部最大径約64.8cmを測る。

2の須恵器壺蓋は、口縁は内側に斜めに伸び、断面三角形に近い。口縁部は天井部に向かってやや内傾気味に延び稜部に至る。稜部は緩やかな断面三角形を呈する。天井部は内弯し丸みを持つ。調整は、口縁部外面天井部内面と天井部外面の約2分の1は回転ナデ、残りの天井部外面は回転ヘラ削り。口径約13.6cm、器高約4.7cmを測る。3の須恵器提瓶は、口縁部が欠損し、口縁部と体部の界から底部の約3分の1が残存している。体部前面は内弯し丸味を持つ。体部後面はやや内弯する。内面の中央付近に約6cmの円盤充填の痕跡が認められる。底部は内弯し丸味を持つ。器高約21.0cm以上、最大幅約20.5cm、側面最大幅14.2cmを測る。

出土遺物から古墳は、古墳時代後期初頭（6世紀初頭）のものと推測される。

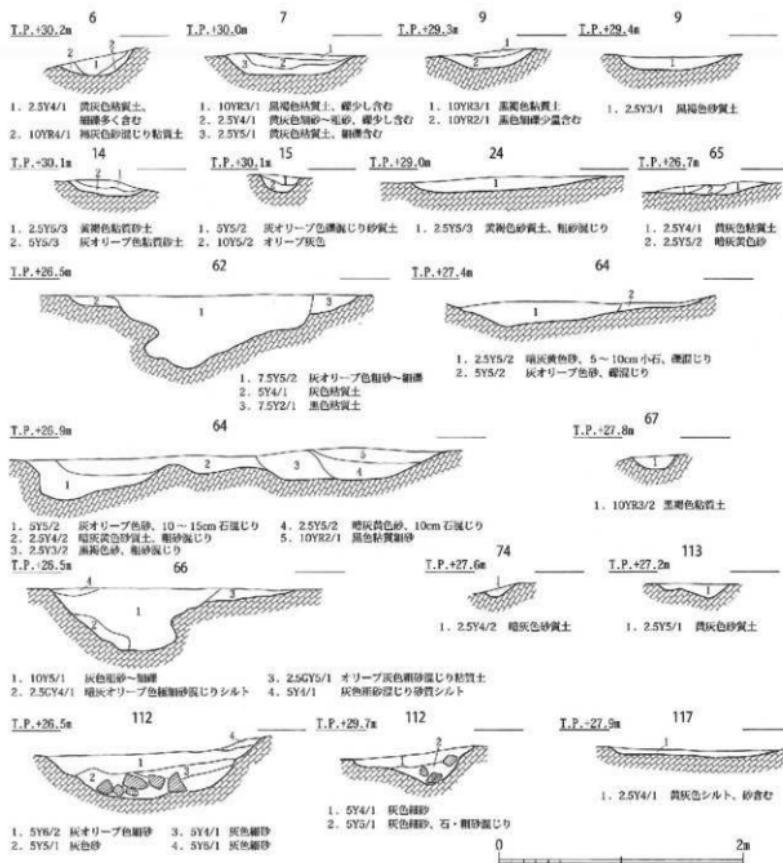
2. 溝の調査

第1・2調査区から検出した溝は、15本である。検出した溝は検出状況や形状から、地形に傾斜に沿って形成された自然流路ないしは若干手を加えただけのものが多い。溝内から出土した遺物は、62溝以外からはほとんど認められなかった。

6溝（第10図、図版10） 第1調査区北部西端付近に位置する。北東側のX=-128,374、Y=-41,272.5付近を起点とし、斜面とほぼ平行に南東方向に延び、X=-128,375、Y=-41275付近で調査区外へと続く。検出長約3.7m、幅約0.6m前後、深さ約0.2mを測る。

7溝（第10図、図版10） 第1調査区の北西側に位置し、斜面をほぼ直行する溝である。溝は、北東側の調査区との界、X=-128,378、Y=-41,266付近から南西方向に延び、X=-128,382、Y=-41,270付近で、近世の削平を受け欠失している。検出長約5.0m、幅約1.1m、深さ約0.2mを測る。

9溝（第10図、図版10） 第1調査区北東端から第2調査区北西端付近に位置し、斜面とほぼ平行に北東から南東方向に延びる。溝の北東側X=-128,415、Y=-41,238付近、北西側X=



第10図 溝断面図

-128,397、Y=-41,249付近で両端共、近世に削平を受け欠失している。検出長13.5m、幅0.8m、深さ約0.2mを測る。

14溝（第10図、図版10） 第1調査区北部東側に位置し、斜面にほぼ平行に東西に延びる溝である。北側のX=-128,378、Y=-41,267付近で溝7、南側のX=-128,378、Y=-41,272付近で溝15に切られている。検出長約5.0m、幅約0.7m、深さ約0.2mを測る。

15溝（第10図、図版10） 第1調査区の北西側に位置し、斜面をほぼ直行する溝である。溝は、北東側の調査区と界付近、X=-128,374、Y=-41,270付近から南西方向に延び、X=-128,378、Y=-41,272付近で、近世の削平を受け欠失している。第1調査区北部東側、検出長2.5m、幅約0.7m、深さ約0.15mを測る。

24溝（第10図、図版10） 第1調査区の中央付近に位置し、斜面にほぼ平行に北西方向から南東方向に延びる溝で、土層観察の結果古墳よりは古いことを確認している。溝の両端が収束し、北西端がX=-41,268、Y=-41,268付近、南東側がX=-128,396、Y=-41,258付近で検出した。検出長約14.0m、幅0.4mから1.3m、深さ約0.15mを測る。

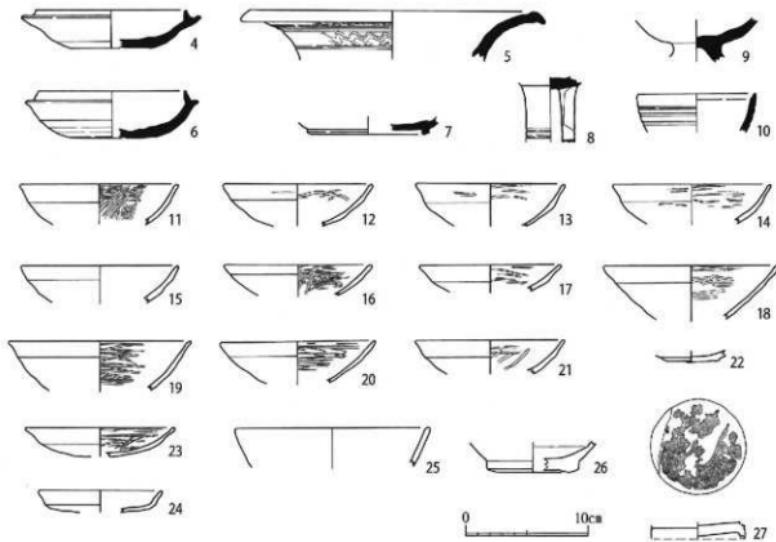
62溝（第10図、図版10） 第2調査区南東側に位置する。北側の調査区との界X=-128,452、Y=-41,230付近から西側に延び、X=-128,445、Y=-41,235付近で南側にほぼ直角に屈曲し、X=-128,444、Y=-41,238付近で南の調査区外へと延びる。溝は、東端のX=-128,451、Y=-41,232付近から66溝が分岐している。検出長約10.0m、幅約1.7m、深さ約0.7mを測る。溝埋土中より須恵器壺身、須恵器壺片、須恵器甕片、土師器片などが出土している。

出土遺物（第11図、図版12） 4は須恵器壺身である。立ち上がり部は短く、受部から口縁端部にかけて外反気味に内傾する。口縁端部は丸く收めている。受部は斜め上方に張り出しがい。体部は受部からやや直線的に斜めに下り、底部は平に近い。調整は、外面の底部と体部の4分の1が回転ヘラ削り、残りが回転ナデを施す。口径約12.3cm、器高3.3cmを測る。5は須恵器甕である。口縁部の一部のみ残存している。口縁は斜め下方に垂れ下がり、断面三角形に近い。口縁から頸部にかけて大きく外反する。頸部外面には1条ないしは2条の沈線によって区画し、内部に5条の波状文を施す。口径約28.3cm、残存高約4.1cmを測る。

出土遺物から溝の時期は、6世紀後半と推定される。

64溝（第10図） 第2調査区北部中央付近、北東側の調査区界、X=-128,426、Y=-41,228付近から南方向に下り、X=-128,436、Y=-41,230付近で緩く北西方向に向きを変え、X=-128,4440、Y=-41,240付近で南側の調査区外へと延びる。溝は、北西方向に向きを変え、ほぼ同じ地点で二股に分かれる。分岐した南側の溝は、62溝に切られている。検出長22m、幅1.5mから2.5m、深さは底面の凹凸が激しく、0.2mから0.4mを測る。また、溝の南半は、溝の埋土上の様相が変わることから、氾濫等の影響を受けたものと推定される。

65溝（図版11） 第2調査区中央から南東側に存在する。南東側の調査区の界、X=-128,426、Y=-128,426付近から斜面をほぼ平行に延び、X=-128,440、Y=-41,240付近で



第11図 出土遺物実測図（1）

収束する。長さ8.5m以上、幅1.0mから2.5m、深さは底面の凹凸が激しく、0.1mから0.5mを測る。

66溝（第10図、図版11） 第2調査区南西角、62溝との接点X = -128,450、Y = -41,231付近から南西方向に下り、X = -128,451、Y = -41,235付近で調査区外へ延びる。検出長0.0m、幅0.9mから1.5m、深さ約0.3mを測る。溝は、62溝から分岐していること、埋土の堆積状況がほぼ同じであることから、62溝の支流であったものと推測される。

67溝（第10図、図版11） 第2調査区中央部東側、X = -128,425、Y = -41,229からX = -128,427、Y = -41,232付近にかけて存在する。溝の南端は、64溝、北端は117溝と切りあい収束する。検出長約3.3m、幅約0.2m、深さ約0.1mを測る。

74溝（第10図） 第1調査区南部東側、X = -128,432、Y = -41,226からX = -128,437、Y = -41,225付近にかけて存在する。斜面と平行に南北方向に延びており、両端は収束する。検出長約4.6m、幅約0.25m、深さ約0.1mを測る。水田の屋根側に存在する溝である可能性が高く、埋土や検出状況から近世と推定される。

112溝（第10図、図版11） 第2調査区中央部西側、X = -128,434、Y = -41,241付近を起点としX = -128,441、Y = -41,238付近で、64溝の北側支流と合流する。検出長約7.2m、幅約1.8m、深さ約0.5mを測る。

113溝（第10図） 第2調査区南部東側、X = -128,441、Y = -41,227からX = -128,440、Y = -41,223付近にかけて存在する斜面に直行する溝で、両端は収束する。検出長約6.5m、幅約

0.7m、深さ約0.05mを測る。

117溝（第10図） 第2調査区中央部東側、東側の調査区との界、X = -128,442、Y = -41,230付近から西方向に斜面を下り、X = -128,427、Y = -41,235付近で収束する。検出長7.5m、幅約1.6m、深さ約0.05mを測る。67溝と切りあっており、平面観察の結果、67溝の方が新しい。

3. 柱穴の調査

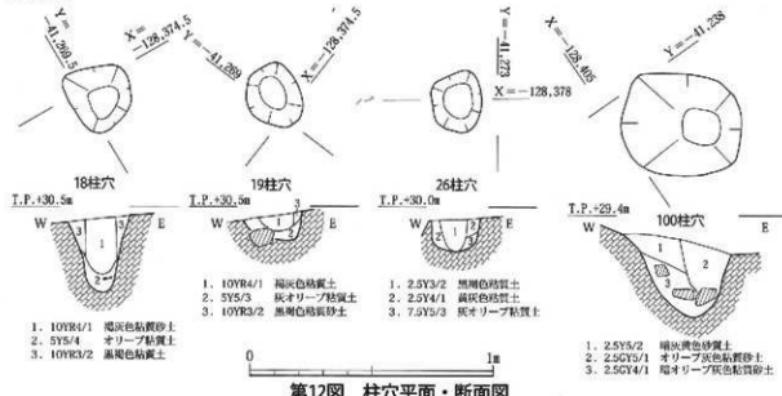
第1・第2両調査区の東側で、後世の削平を受けなかった標高の高い地点を中心に、合計4個の柱穴を検出した。第1調査区で検出した18・19・26柱穴は周辺から出土した遺物から中世のものと推測される。その地点は調査区の中でも最も標高が高く、比較的平坦であることから、地形的に見て、調査区北側の調査区外の範囲もその平坦面が続き、中世の建物が存在する可能性が高いと推測している。

また、これ以外に平面・断面とも柱穴に近い形を呈しているが、埋土が砂であることや断面に柱痕が認められないこと、穴の位置が不定方向であることから柱穴でないと判断した。以下、それぞれの柱穴ごとに記述する。

18柱穴（第12図、図版11） 第1調査区北部西側、X = -128,375.3、Y = -41,270.5付近で検出した。平面形では円形に近い形を呈し、径約0.2m、深さ約0.3mを測る。土層断面観察の結果、約0.2mの柱痕が確認した。柱穴内から土師器片が出土している。

19柱穴（第12図、図版11） 第1調査区北部東側、X = -128,374.2、Y = -41,269.5付近で検出した。平面形では円形に近い形を呈し、径約0.2m、深さ約0.3mを測る。土層断面観察の結果、約0.2mの柱痕を確認した。

26柱穴（第12図、図版11） 第1調査区北部東側、X = -128,378、Y = -41,272付近で検出した。径約0.3m、深さ約0.45mを測る。15溝と切りあっており、その埋土状況から、15溝の方が新しい。



第12図 柱穴平面・断面図

100柱穴（第12図、図版11） 第2調査区北部東側、X = -128, 405、Y = -41, 241, 3付近で検出した。径約0.5m、深さ約0.25mを測る。底付近に根石が2点あり、埋土の断面観察でも柱痕と思われる埋土が確認できた。しかし、周辺に同じような柱穴は検出せず、掘立柱建物にはならなかった。

4. 出土遺物（第11・13図、図版12・13・14）

遺構に伴う遺物の他、包含層や水田造成時の盛土中からも、埴輪片や土器片などが出土した。

土器 6は須恵器环身である。立ち上がり部は短く、受部から口縁端部にかけて外反気味に内傾する。口縁端部は丸く収めている。受部は斜め上方に張り出し丸い。体部は受部からやや内弯気味に斜めに下り、底部はやや丸みを持つ。調整は、外面の底部と体部の2分の1が回転ヘラ削り、残りが回転ナデを施す。口径約12.0cm、器高3.9cmを測る。

7は須恵器环身で底部と高台の一部のみ残存している。高台は貼り付け高台で断面四角形に近い。底部はやや内弯する。内外面とも回転ナデによって仕上げている。高台径約9.5cm、残存高約1.0cmを測る。

8は須恵器長脚2段高环の脚柱部片で、長脚2段の上部のみ残存している。脚柱部のほぼ中央付近に2条の沈線によって上下を区画し、その間にほぼ対角線の位置の2箇所に透かし孔を穿つ。透かし孔は内面まで貫通せず、断面内で止まっている。内外面とも回転ナデによって仕上げている。透かし孔は幅約0.3cm、長さ約3.8cmを測る。脚柱部は径約4.1cm、残存高5.7cmを測る。

9は須恵器高环の脚部と坏部の底部付近の一部である。坏部は、脚部の界から内弯し、外方に延びる。脚部上部のみ残存し外反気味に外下方に伸びる。内外面とも回転ナデによって仕上げている。残存高約4.0cmを測る。

10は須恵器盤で口縁と体部の一部が残存している。口縁は断面三角形に近く、口縁から底部に向かって内弯しながら下る。体部外面には3条の沈線を施す。内外面とも回転ナデによって仕上げている。口径約9.6cm、残存高約3.2cmを測る。

11から21は瓦器椀の口縁部から体部片である。外面にほとんどミガキを施さないものが多く、指オサエとヨコナデによって仕上げている。口縁端部は丸く仕上げている。内面は細い雑なミガキを施す。

22は瓦器椀の底部で、椀の底が僅かに浮く程度の小さな高台を持つ。

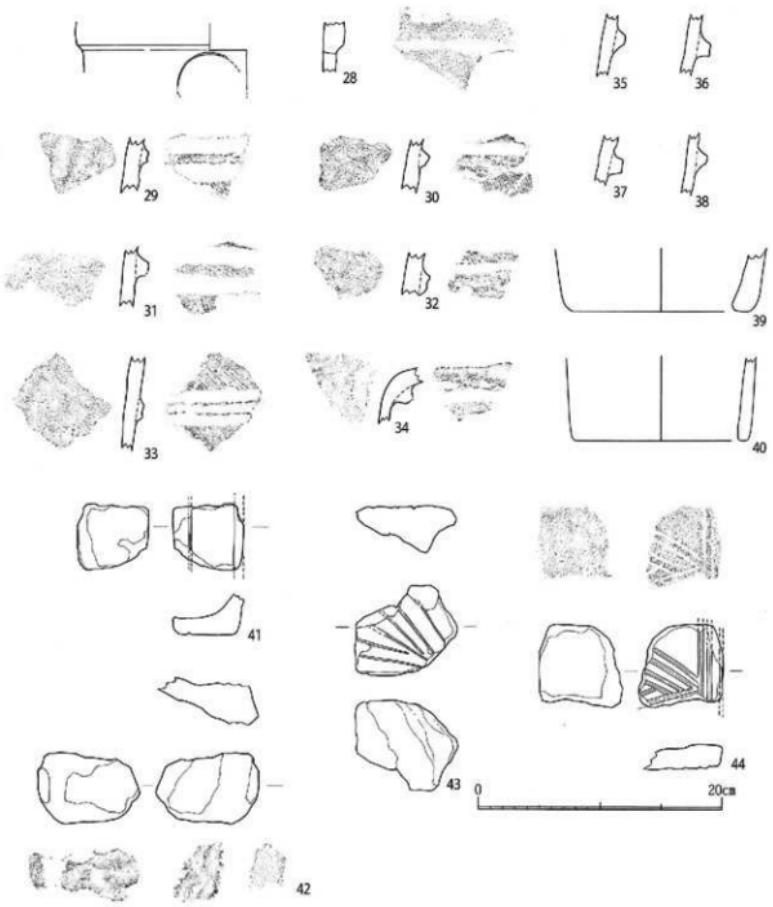
23は瓦器小皿で浅く内弯する底部から摘んで立ち上がる口縁部を造る。内面は壁面に沿ってミガキ調整をする。

24は上師器小皿で平に近い底部を持ち、そこから外上方に短く延びる。口縁端部は丸い。

25は青磁碗の口縁部から体部の一部である。口縁端部は丸く仕上げ、口縁から底部に向かって直線的に斜め下方に下る。

26は白磁碗の底部で、底を削って高台を造っている。

漆器 27は漆椀の底部である。高台は削って造られており、断面四角形を呈する。内面に赤色



第13図 出土遺物実測図（2）

の漆が塗られていることから全面に存在していたものと推定される。

埴輪 土層最上部の水田造成時の盛土中から、埴輪片が少量出土している。その多くは円筒埴輪の突帯付近であるが、形象埴輪片も数点出土している。埴輪片は、主に第1調査区の北部東側付近で出土しており、第2調査区ではほとんど出土しなかった。このことから、第1調査区の北側に隣接する海北塚北方遺跡付近には、かつて古墳が存在しており、第1調査区周辺を埋めて水田を造成する際に、その古墳を崩して盛土に使用したため、第1調査区には、その古墳に伴っていた埴輪片が多く含まれていた可能性がある。

28から33、35から38は、円筒埴輪の突帯部付近の破片である。突帯の断面形状はしっかりとしめた台形状を呈するものが多く、上面が僅かにくぼむ。摩滅によって内外面の調製が不明なものが多いが、外面をタテハケ、内面は指ナデと推定されるが不明なものが多い。

34は朝顔形埴輪の口縁部段である。口縁部を欠き口縁部径は不明である。

39・40は、底部片である。ともに外面・内面調整とも摩滅により不明である。プロポーションは、両片とも僅かに開きながら立ち上がる。底部径は39が14.6cm、40が14.2cmを測る。

41は家形埴輪の一部と考えられる破片である。破片は、「L」字に屈曲していることから家のコナー付近と推定される。長辺側に入口部分と推定される切込みが存在する。外面には柱を意味していると推定される2条の沈線が認められる。調整は摩滅のため不明である。

42は盾形埴輪の一部である。外面に沈線によって三角形を描きその内部にも沈線を施している。

43・44は、形象埴輪片と推定されるが器種は不明である。

第4章 まとめ

大阪府嘗西福井住宅建て替えに伴う西福井遺跡の発掘調査は、調査期間約3年、調査総面積7,700m²に及んだ。調査の結果、弥生時代後期では、竪穴住居跡5棟。古墳時代では、後期初頭の小規模墳1基、後期後半の掘立柱建物5棟、竪穴住居跡3棟など。平安時代では3棟の掘立柱建物、中世では掘立柱建物1棟などを検出した。これ以外に出土遺物として古墳時代後期と推定される埴輪、また柱穴など遺構は極僅かであったが、中世の遺物が出土している。

これら検出した遺構・遺物を検討し、若干の考察を加えた。

1. 弥生時代

第2次調査区の丘陵低位部で検出されている。このことから弥生時代後期には標高の高い地点までは、開発が及んでいないことが明らかとなった。周辺の後期の遺跡としては、安威遺跡、宿久庄遺跡などがあるが大きな広がりを持たない。遺構の範囲は、第1次調査区では自然河川から遺物は出土するものの遺構は存在しない。第3次調査区では全くその時代の遺構・遺物は出土していない。このことから弥生時代後期の遺構は、第2次調査区の一部の地区に限られていたものと推定される。

	形状	規模(m)	時期	出土遺物	備考	
1	円形	8.0~9.0	後期		5棟中で最も古い	II
2	円形	東西7.0、南北5.5	後期			II
3	方形	東西5.0、南北4.0	後期	二重口縁壇	柱穴なし	II
4	方形	東西4.0、南北3.5	後期	壺蓋	南側上坑、炭含む	II
5	円形	8.0	後期	壺、甕	中央に炉穴あり	II

弥生時代後期住居一覧表

2. 古墳時代の遺構

古墳は、1基検出されている。時期的には6世紀初頭に位置づけられる小規模墳である。検出した古墳は、茨木川西岸の古墳群の中では、西福井遺跡で検出した9基の小規模墳を伴う総数12基の古墳より新しく、次の時期の6世紀初頭に位置づけられる。

今回検出した古墳には埴輪は伴っていないが、調査区内から少量ながら出土している。また、調査地区北端からの北西方向に約100m離れた、2004年に(財)大阪府文化財センターが発掘調査を行った地区においても、埴輪が出土している。時期的には6世紀初頭に位置づけられ、検出した古墳の時期とほぼ同じである。出土した埴輪は、上方の丘陵上に存在する前方後円墳である南塚古墳からのものである可能性が考えられる。ほぼ同時期と推定される青松塚古墳、海北塚古墳には、埴輪が存在すると言った記述が見えない。

当初は、出土した埴輪は、南塚古墳のものと考えていたが、今回の調査で検出した小規模墳以外に古墳が存在していた可能性が位置関係から考えられ、埴輪を伴った古墳の存在を窺わせる資料といえる。

両調査区の位置関係から埴輪の出土地域は、丘陵縁辺部の延長約300mの範囲であり、それより下部に存在する府賛住宅に伴う調査地区の第1次調査・第2次調査の地区では、古墳ないしはそれに伴うと推定される遺物は検出されていない。このことから、丘陵縁辺部に沿って築造されたものと推察される。形態としては、小規模墳であった可能性が高く、古墳の被葬者の階層差が現われていたものと推定される。

また、今回の調査地域である茨木川西岸に存在する福井地区周辺の古墳の様相は、一連のものとして捉えるべきであると考えている。ただ、古墳時代前期に築造された紫金山古墳については、下記に記述している古墳より築造時期が100年以上離れているため、何らかの深い関係を持つ古墳であると推察しているが、三嶋地域全体で考えるべき特別な意味を持つ古墳と捉えたい。

その後、二重周溝を持った円墳や帆立貝式古墳を検出した5世紀後半に位置づけられる総数12基の西福井古墳群から始まり、今回検出した6世紀初頭の福井古墳へと続く。6世紀中頃から後半になると、福井遺跡周辺に存在する内部主体に横穴式石室を持つ南塚古墳（前方後円墳）、青松塚古墳、海北塚古墳の一群のように規模の大きな古墳と西福井遺跡の北西側に存在する新屋古墳群のような群集墳とに分かれ、位置を変えて存在する。この現象は、被葬者の階級差が表れているのではないかと考えている。

福井地区に存在する古墳は、5世紀後半から6世紀後半まで約100年の間、連綿と続いた一連の古墳群と捉えるべきなのではなかろうか。そして最も古墳の規模が拡大したのは6世紀後半で、出土した遺物も豊富である。また、古墳の位置も紫金山古墳より下の丘陵上に築造されていることから紫金山古墳を盟主と仰いだ古墳群といえよう。

また、古墳時代後期の集落域は限定していたものと推定され、第1調査地Xのみで検出されている。住居跡3基と掘立柱建物5棟を検出した古墳時代後期末の集落域と古墳との関係であるが、南塚古墳、青松塚、海北塚と出土した遺物を検討してみると、集落域で出土した遺物が形式的には新しい。調査範囲が狭いため断定は出来ないが、周辺での造墓活動が終った後、集落が造られたものと推定される。区画溝に囲まれた住居跡と掘立柱建物が存在するものの、上記の古墳から出土したような目立った遺物も出土していないことから、上の丘陵に存在する古墳と直接結びつけることは出来ない。しいて挙げるとするならば、調査地区北方約700mに存在する群集墳である新屋古墳群ではないかと考えている。

住居跡

	形状	規模 (m)	時期	出土遺物	備考	
1	方形	東西5.15、南北4.7	後期	須恵器壺身、杯蓋、土師器	北西側に区画溝	I
2	方形	東西5.15、南北4.7	後期			I
3	方形	東西不明、南北4.7	後期	須恵器、土師器		I

古墳時代住居跡計測値表

掘立柱建物

	梁行 (m)	桁行 (m)	時期	遺物	備考	
1	2間 (4.4)	3間 (5.2)	後期	須恵器蓋、土師器	総柱	I
2	2間 (4.9)	4間 (7.1)	後期	土師器		I
3	2間 (3.9)	4間 (6.67)	後期			I
4	2間 (2.0)	2間 (4.2)	後期	土師器		I
9	不明	1間～(2.0)	後期			I

古墳時代建物計測値表

古墳（方墳）

北東一南西辺 (m)	北西一南東辺 (m)	周溝幅 (m)	周溝深さ (m)	時期	
約6.0	約7.0	約1.0	約0.2	後期初頭	Ⅱ

古墳計測値表

3. 古代

奈良時代の遺構については、今回の調査においては検出されていない。ただ、遺構・遺物の検証はまだなされていないが、西福井遺跡において方形の柱穴を持つ掘立柱建物と奈良時代の遺物が検出されている。

平安時代の遺構については、掘立柱建物3棟を検出している。周辺の遺跡では安威城跡からほぼ同様な時期の建物群が検出されている。遺構は、第1次調査区のみで検出され、第2次・第3次調査区まで及んでいない。周辺の地形から判断して平安時代の遺構の範囲は、丘陵縁辺部に沿って西側に延びるものと推定される。

	梁行 (m)	桁行 (m)	遺物	備考	
5	2間 (4.1)	3間 (6.6)	須恵器壺蓋、土師器、黒色土器		I
6	3間 (5.7)	4間 (8.5)	土師器羽釜、甕、皿、黒色土器		I
7	2間 (4.25)	4間 (5.9)	土師器		I

平安時代建物計測値表

4. 中世

中世になると第1次調査区で掘立柱建物1棟、柱穴は第3次調査区で少數ながら検出されている。中世の遺物はどの調査区とも溝遍なく出土し、また西福井遺跡においても遺構が検出されている。のことから、今回の調査では、集落とはいえないものの、遺構は広範囲に広がるものと推察される。

	梁行（m）	桁行（m）	遺物	備考	
8	2間（3.6）	4間（8.1）	須恵器、土師器、瓦器碗、黒色土器		1

中世建物計測値表

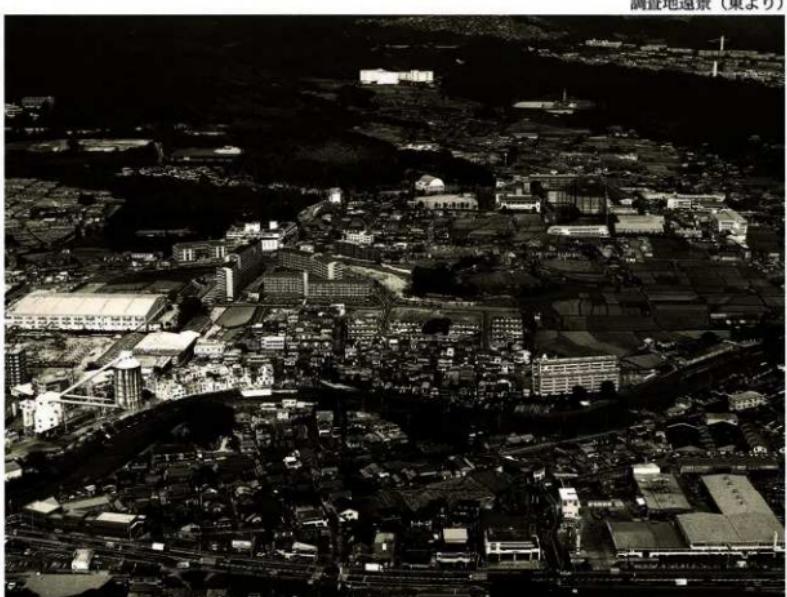
府営福井住宅建て替え工事に伴う発掘調査・整理作業が終了するに際して以上のように周辺の遺跡を含めて遺構・遺物に対して若干の検討を加えた。前述した西側に存在する福井遺跡と東側に存在する西福井遺跡の間には低位段丘面が広がっており、現在周知の遺跡の範囲ではない地域まで遺跡が広がる可能性が高い。現在この周辺の遺跡としては紫金塚古墳が特に有名であるが、今後この古墳を含めたこの地域の遺跡のあり方が問題となるであろう。

図 版





調査地遠景（東より）



調査地遠景（西より）

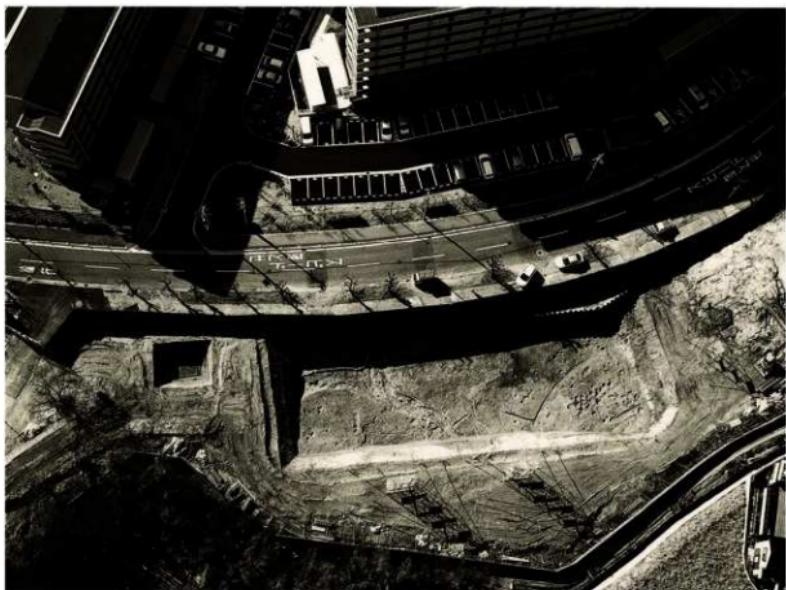


調査地遠景（北東より）



調査地遠景（南東より）

図版3 全景



2区全景（真上より）



1区全景（南より）



1区全景（北より）



1区全景（南より）



古墳全景（北より）



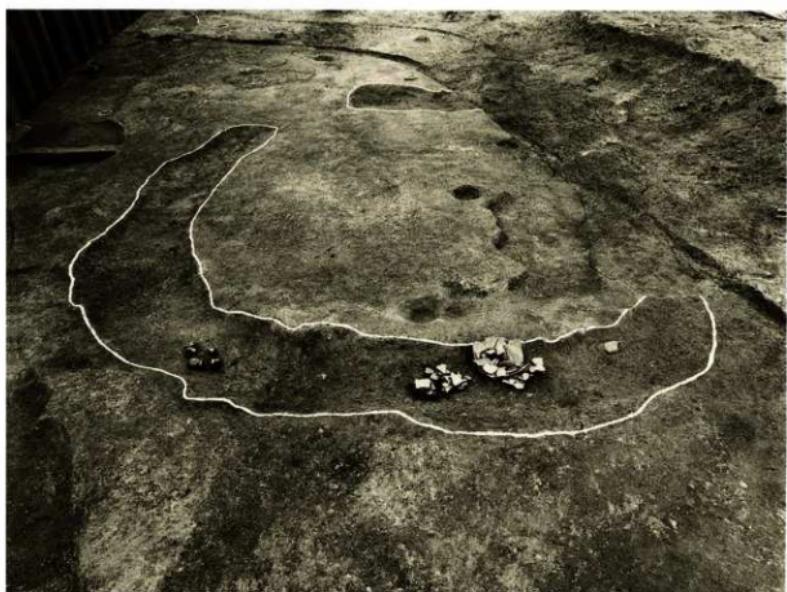
2区全景（南より）



2区溝群（東より）



2区溝（南より）



古墳周溝遺物出土状況



古墳周溝南側遺物出土状況

図版 8
遺構



周溝南側甕出土状況（上部）



周溝南側甕出土状況（下部）

図版9
遺構



古墳北周溝断面（西より）



古墳南周溝断面（西より）



古墳西周溝断面（南より）



6 溝断面（南より）



7 溝断面（西より）



9 溝断面（南より）



14 溝断面（北西より）



15 溝断面（西より）



24 溝断面（南より）



62 溝断面（東より）



62 溝西端断面（東より）



65溝断面（南東より）



66溝断面（東より）



67溝断面（南東より）



112溝南側断面（南東より）



18柱穴断面（南より）



19柱穴断面（南より）



26柱穴断面（南より）



100柱穴断面（南西より）

図版
12
遺物



2



3



5



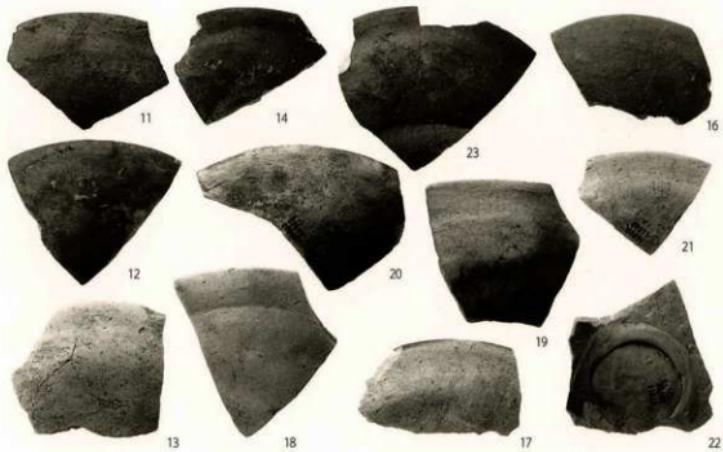
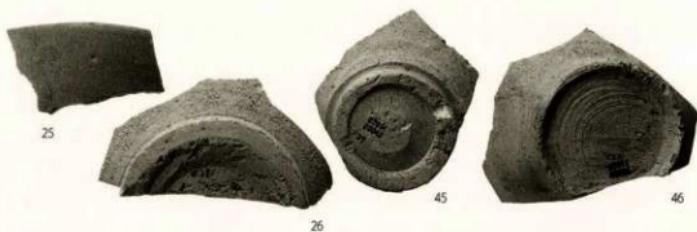
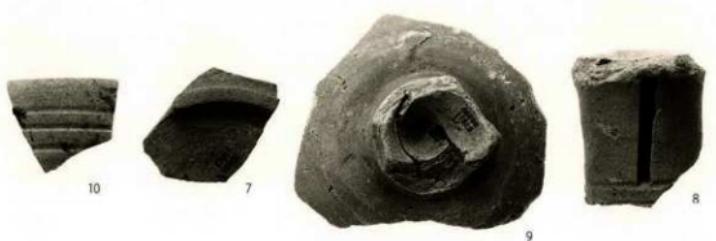
6

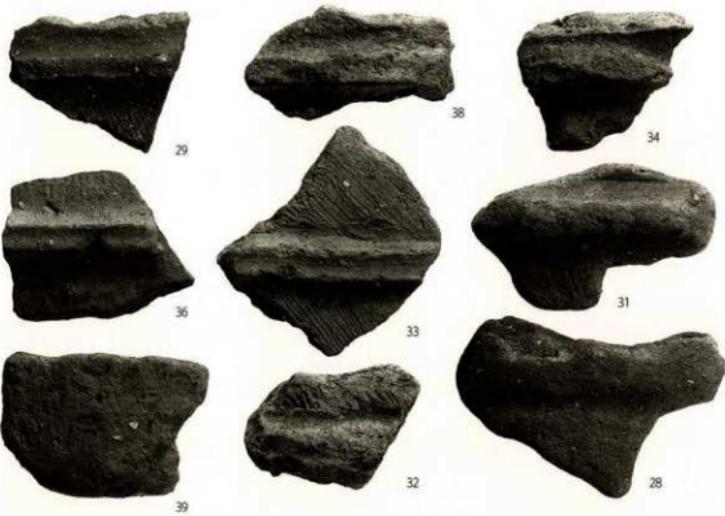


4



1





報 告 畫 抄 錄

ふりがな	ふくいいせきⅢ
書名	福井遺跡Ⅲ
副書名	府営西福井住宅建替え事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2009-12
編著者名	奥和之 富田卓見
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351(代)
発行年月日	2010年3月31日

大阪府埋蔵文化財調査報告2009-12

福井遺跡Ⅲ

—府営西福井住宅建替え事業に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成22年3月31日

印刷 株式会社中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号

